

ひろしま みやもとけ
広島市 宮本家文書 目録

(『広島県立文書館 収蔵文書目録』第1集 所収)

広島県立文書館

平成26年(2014)3月

凡 例

1 本目録は、『広島県立文書館 収蔵文書目録』第1集(平成6年3月刊)に掲載された「広島市 宮本家文書」の目録である。

2 目録の各項目は以下のとおり。

請求番号 本文書群の群番号(198804)と、この項目の記号を組み合わせたものが請求記号になる。

【例】 37/1 (請求記号)

198804
37
1

表 題 資料にある原表題をそのまま採った。原表題がないものは、仮題を付けて〔 〕書きとした。内容について補記が必要な場合は、()書きで補った。頭に○を付したのは、集合形態等をした文書の内訳であることを示す。

年 代 資料に記された作成年月日を探り、推定は()書きとした。

作 成 資料にある作成者名をそのまま採り、資料に授受関係のあるものは 結んで表記した。

形 態 資料の形態を記した。

数 量 資料の点数を記した。

備 考 補記すべき備考があれば、 付きで示した。

3 文書の排列は、文書群固有のあり方に基づき、項目別に編成した。同一項目内の文書は、原則として年代順としたが、年未詳のものは、末尾に置いた。

4 利用の参考のため、本文書群の解説を冒頭に付した。

解 説

1 宮本家文書の由来

宮本家文書は、幕末から明治期にかけて、広島心学の衰退期にありながらその再興に力を尽くした心学者、宮本亥三二（愚翁）の日記、著作物を中心とする文書群である。

広島県史編さん室では、昭和48年11月8日に、当時佐伯郡五日市町旭園（現広島市佐伯区旭園）の宮本家で、宮本富美氏のお世話で同家文書の調査を行い、64点にわたる宮本愚翁の著作資料と、心学関係の雑誌・図書の刊行物について目録を作成し、そのうち49点について写真撮影を行った。

結局、『広島県史』に宮本家文書を収載することはなかったが、調査に加わった頼祺一氏等の紹介によって、佐々木潤之介氏が、宮本亥三二の「日記抜粋」〔26〕の中から、明治4年(1871)11月15日の部分に書かれた6項にわたる流言を、「世直し」状況下の民衆の期待と不安を示すものとして、『世直し』（岩波新書、1979年）などの著書で取り上げたことから、宮本家文書の名前は全国的にも知られるようになった。「日記抜粋」のこの流言は、その後『日本近代思想体系21 民衆運動』（岩波書店、1989年刊）にも収められることとなった。

県立文書館では、昭和63年の開館に際して、このフィルムと複製資料の公開利用について許可して下さるよう、所蔵者の宮本誠之氏（故宮本富美氏のご子息）にお願いしたところ、快諾していただくとともに（その目録は『広島県立文書館複製資料目録』第一集に掲載）、昭和63年4月11日付けで、昭和48年に撮影したものを中心に、宮本家文書64点を県立文書館に寄贈していただいた。なお、同年11月21日にさらに1点〔38〕が追加寄贈された。なお、宮本家にはなお亥三二の著書が数点保存されている。

つぎに、寄贈された宮本家文書の利用の便をはかるため、遺された「日記」や著作物、亥三二に関する伝記などをもとに宮本亥三二の業績を紹介したあと、宮本家文書の概要を述べることにする。

2 宮本亥三二について

宮本亥三二（字は弘道、号は知水、明治35年11月より愚翁）は、天保10年(1839)3月2日、広島大手町筋六丁目村（現広島市中区大手町）に、広島藩の下級藩士中村内蔵助道貫（1800～1856）の四男として生まれた。

父の中村内蔵助（号は徳水）は、広島で心学者矢口来応の指導を受け、また江戸へ出て大島有隣に従って心学の奥義を究めた結果、1年10か月の江戸詰の公務の間に、江戸の講舎で開いた道話・会輔は365回に及んでいる。隠居した後に、江戸の講舎、参前舎の第五世の舎主として招かれ、衰退へと向かっていた江戸心学の興隆をもたらし、その活躍は広島心学の名声を全国にとどろかせた。この中村徳水の日記や著作、手紙などは亥三二が晩年整理し、現在東京の参前舎などで保管されている。広島県史編さん室では、これらについても調査を行って部分的ではあるが写真におさめ、現在、複製資料として広島県立文書館で利用することができる（『広島県史』近世資料編VIには、徳水の日記である「東護院様公私日記」の一部を掲載）。

亥三二は、その謹厳で学究的な性格から、実父徳水の死後に心学を志して矢口来応らに師事し、22歳で広島の心学講舎、歓心舎で道話を開くに至っている。同じく広島藩士の宮本正次郎徳陰の養子となったのは文久2年(1862)のことである。翌年藩から御用達所坊主を命じられ、剃髪して亥三と名乗った後、京都詰となったため、京都で吉岡教斎の門にも入っている。

明治維新直後に心学の採用について藩に建白し、それが幕末からの騒然とした「世直し」の社会情勢への対応を迫られる藩に容れられるところとなったため、亥三二は還俗し、慶応4年7月に広島藩知郡局調役御代官所附となった。その後、藩の命によって孝子奇特者を調査したり、賀屋忠恕ら同志の心学者と藩内を巡回して各地で心学講話を開き、民衆の教化に当たっている。

廃藩置県後は、一時広島県の租税課に勤務したが、明治8年8月に広島県を依願退職し、家督も

養子観太郎に譲って退隠した。また、旧藩士の秩禄奉還後の資産を保護する目的で設立された金融会社、共済社創立に加わり、明治9年1月より解散する24年12月まで、その業務拡張と経営に力を尽くした。

明治政府によって心学は神道とされて教義の変更も余儀なくされ、文明開化によって封建的な道徳心を顧慮しない西洋思想が流入し、心学は廃れてしまった。しかし明治12年ころから、谷干城らが主唱して心学再興運動が始まり、広島でもこれを機に心学者が会合を重ね、明治17年4月、県令千田貞暁に対し「心学道話再興之儀ニ付伺」〔21〕を提出した。その結果再興の内意を得たため、翌年から亥三二らが中心となって心学の会輔を再開し、25年6月からは亥三二宅に「心学教会」の掛札を出し、その趣意書を印刷配布している。

しかし、心学はもはや関東の大日本報徳会のような隆盛を見ることはなく、同志が次々と他界していく中で、亥三二は読書講学を怠ることなく、盛んに新聞などへの投書活動を行うかたわら、明治31年1月には道生館という下宿屋を始めている。同年10月には、赤十字社広島支部看護婦養成所の修身の講師に迎えられ、青年・女子の教育活動にも従事した。その間、日記は欠かさず、心学道話の著述も多数にわたった。また、晩年には広島の心学者の伝記資料の調査と蒐集につとめ、阪本辰之助の依頼によって、当時『広島日報』で連載していた「続芸備偉人伝」に原稿を提供することとなった（宮本家文書には、その原稿のうち「栗原如心」と「万代又右衛門」〔20〕が残されているだけである）。

このように、心学の復興を思い描きながらも悠々自適の晩年を過ごした亥三二は、病を得て明治36年3月22日、享年65歳で自宅で没した。亥三二の著作は、死後の明治43年12月に、清水俊の校訂によって正続二編の『愚翁道話』が刊行されただけであり、多くは未刊のままとなっている。その後昭和16年3月、石川謙の校訂により1冊にまとめられて再刊された『愚翁道話』は、大学道話、中庸道話、論語道話、孟子道話、一般道話（「天地之性」「心の取舵」「衛生」「報恩」「春の日くらし」）および付録という構成になっている。

3 宮本家文書の概要

寄贈された宮本家文書は、先にも触れた通り、宮本亥三二の日記と心学道話関係の著作及び亥三二の手になる写本類がほとんどである。いずれも、厳肅で几帳面な性格、写字に巧みであったことを反映して、特に「日記」や一部の著作では、小冊子に細かな文字で書きつけられている。

昭和16年再刊の『愚翁道話』に付せられている、亥三二の孫にあたる宮本一吉氏の「序」によると、亥三二は晩年、同志の心学者や教育宗教家を訪問するか、委嘱を受けて道話に行く他は、自宅で読書をするか、「写本が何か頻りに細字で書いて、小冊子様なものを綴っては人に与へ、又は保管して」いた。明治36年に亥三二が亡くなって、その遺言により「長持に一荷」あった心学に関する書籍・書類は、高弟であった岡田俊太郎の私設図書館で保管されることとなった。しかし、その死後、一吉氏がそれらを「然るべく処理」して欲しいと依頼したため、これらは書店に売却されてしまった。現在残されているものは、それ以外に宮本家で保管されていたものということになる。

この目録では、それらを日記、著作、建白書・伺、写本類の4つに大きく分類した。以下では、そのうちいくつかについて簡単な解説を加え、宮本家文書の解題にかえたい。

(1) 日記・日記抜粋〔26〕～〔36〕

現在残されている宮本亥三二の日記は、「日記」三～七を抜書した「日記抜粋式」（慶応4年6月6日～明治13年8月3日）と、「日記」八（明治13年11月24日～14年12月31日）、および拾壱から拾九まで（明治17年4月1日～35年12月31日）の計11冊であり、いずれも小型の冊子（横半、一部豎半）に細かな文字でびっしりと書き込まれている。ただし、残念ながら九・拾（明治15年1月1日～明治17年3月31日）は見ることができない。また、「日記」壱～七は抜書した後に廃棄されたと考えられ、「日記」壱・弍をもととした「日記抜粋壱」も失われているため、慶応4年以前の亥三二の具体的な事績については、「伝記」などに頼らざるを得ない。昭和16年に再刊された『愚翁道話全』には、校訂者の石川謙による宮本亥三二の年譜が巻末に付されているが、それには、慶応4年以前は、2項

目ながら日記抜粋をもとにしたと思われる記事があるものの、明治13年3月から17年4月までは空白になっていることから、九・拾は、この時点ですでに失われていたと考えるのが妥当であろう。

さて、「日記」の明治35年10月8日には、「日記抜粋成頓せしニ付製本いたし、嘉永年度より明治三十二年迄之分一括として存置」とあることから、「日記巻」及び「日記抜粋巻」は、嘉永年間から始まっていたと思われる。次に、自らの「日記」をいつから、どのような動機から抜粋しようとしたのか不明であるが、日記でその抜粋について記されているのは、明治28年12月25日に「日記帖安政二年より之書抜ニ取懸り、毎夜相認ム」とあるのが最初である。

これらの日記からは、明治年間の心学の動向はもちろんのこと、維新以後の広島における文明開化、その他さまざまな世相を窺い^{うかが}知ることができる。しかしながら、その利用にあたっては、御遺族などのプライバシーを侵害することのないよう、十分に配慮しなければならないことは言うまでもない。

(2) 耳ふくろ〔1〕

「凡例」(総目録)1冊と、巻から拾までの10冊、計11冊から成り、これも、亥三二自らが製本した小冊子となっている。心学道語は、創始者の石田梅岩以来、民衆一般に受け入れられやすいように、世俗にくだけた身近な美談や例え話などを材料としていたが、これは、その「凡例」の内題に「忠孝奇特行状聞書但奇事奇談トモ」とあることが示すように、自らの道話の素材とするために、読書や見聞によって得た、広島をはじめとする全国各地の美談などを抜き書きしたものである。明治年間の五以降は、主に新聞記事から抜書きが行われている。36年10月26日の日記に「耳ふくろ十一冊目を本綴ニする」という記事が見えることから、最晩年までこの作業は続けられていたことがわかる。この「耳ふくろ」は、同志の心学者からも重宝がられ、明治9年3月1日、賀屋忠恕のために凡例とも8冊を用立てたことが記されている。

(3) 宮本亥三二道話草稿〔10〕～〔13〕

「宮本亥三二道話草稿」4冊はいずれも無題で、一部書き直された形跡などもある。道話の素材は『愚翁道話』と同様に四書などからとられ、年代も明治31年から33年にかけてのものであることから、赤十字社看護婦養成所における道話を書き留めたものの一部と思われる。

亥三二は、明治31年10月20日に赤十字社広島支部長服部一三から、看護婦養成所で修身学を講義するよう委嘱されて引き受け、翌21日より33年7月11日まで約2年間にわたって、月に6～9回「看護婦の卵」を前に道話を行った。清水俊から、その講話を雑誌『日本赤十字』に掲載するよう勧められたこともあって、亥三二は出講の度ごとに書き留め、それは数十篇に及んだという。雑誌掲載は亥三二の辞退によって成らなかったものの、その後も公刊することを勧められ、最晩年まで病を押してその編集に力を尽くした。その結果これを5冊の「愚翁遺稿」にまとめ、「心学道話の真似」と題したと自身で述べている(『愚翁道話』自序)。

なお、昭和16年に再刊された『愚翁道話』の一般道話には、宮本家文書のうち、亥三二の著作「衛生」〔6〕、「報恩」〔5〕、「春の日くらし」〔4〕が含まれている。

(4) 恩ほうし〔9〕

これは、亥三二が慶応4年以降藩当局に提出した、心学採用と領内で組織的な心学教化を図る建白書や、明治17年に広島県知事宛に提出した心学再興の伺い、26年に京都明倫舎との間でやりとりした心学再興に関する問答書などを1冊にまとめたものである。これらは、幕末維新期における心学者の社会認識や、それ以降の心学者の活動の意義を探る上で格好の材料を提供している。

その他の参考文献

石川謙『石門心学史の研究』、及川大溪『広島的心学』

(西村 晃)

番号	表 題	年 代	作 成	形態	数量
日記					
26	日記抜萃 式 (参四五六七抜萃中ニアリ) 慶応4.6.6 ~ 明治13.8.3	明治35.10.抜萃	知水居士	小縦冊	1冊
27	日記 八	明治13.11.24 ~ 明治14.12.31	宮亥	小横長	1冊
28	日記 拾壹	明治17.4.1 ~ 明治20.4.20	亥	小横長	1冊
29	日記 十式	明治20.4.21 ~ 明治21.12.31	宮亥	小横長	1冊
30	日記 拾三 罫紙帳面と和紙縦冊合綴	明治22.1.1 ~ 明治22.12.31	宮亥	小縦冊	1冊
31	日記 拾四	明治23.1.1 ~ 明治26.12.31	宮亥	小横長	1冊
32	日記 拾五	明治27.1.1 ~ 明治27.12.31	宮亥	小横長	1冊
33	日記 拾六	明治28.1.1 ~ 明治28.12.31	宮亥	小横半	1冊
34	日記 拾七	明治29.1.1 ~ 明治30.12.31	知水	小横半	1冊
35	日記 拾八	明治31.1.1 ~ 明治32.12.31	知水	小横半	1冊
36	日記 拾九	明治33.1.1 ~ 明治35.12.31	知水	小横半	1冊
愚翁著作 (随筆・道話・和歌)					
1	耳ふくろ		(宮本愚翁)	揃	1揃
1/1	○耳ふくろ 凡例		(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/2	○耳ふくろ 壹		(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/3	○耳ふくろ 貳		(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/4	○耳ふくろ 参		(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/5	○耳ふくろ 四	~ 明治17.3.	(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/6	○耳ふくろ 五	明治17.2. ~ 明治25.11.	(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/7	○耳ふくろ 六	明治25.12. ~ 明治28.12	(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/8	○耳ふくろ 七		(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/9	○耳ふくろ 八	明治29.1. ~ 明治31.5.	(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/10	○耳ふくろ 九	明治31.5. ~ 明治32.10.	(宮本愚翁)	横半	(1冊)
1/11	○耳ふくろ 十	明治32.10. ~ 明治35.8.	(宮本愚翁)	縦冊	(1冊)
8	随筆 「宮本蔵書」印	(~ 明治30)	宮本愚翁	縦冊	1冊
22	夢物語 (宮本亥三二旅中にて共済社についての随筆)	明治15.12.	宮本亥三二	縦冊	1冊
4	春の日くらし 元稿 「宮本蔵書」印	明治26.4.	宮本愚翁直筆	縦冊	1冊
5	報恩 「宮本蔵書」印	明治30.2.	宮本愚翁直筆	縦冊	1冊

番号	表題	年代	作成	形態	数量
6	衛生 「宮本蔵書」印	明治30.2.	宮本愚翁直筆	豎冊	1冊
2	塵はらひ 「宮本蔵書」印	明治30.11.	宮本愚翁	豎冊	1冊
16	未来記 愚翁居士死去以上可取謀条々	(明治35.11.)	(宮本愚翁)	横半	1冊
19	〔称名念仏信心につき愚翁覚書〕	明治36.1.	宮本愚翁	横半	1冊
3	黙殺 「宮本蔵書」印		宮本愚翁	豎冊	1冊
18	〔西村茂樹道德講話および頭書〕	(明治31.2.5)	(宮本愚翁)	豎冊	1冊
24	田中蘭作君の還暦を祝して詠める (和歌1首) 「東京宮本鬼外」ラベル貼付		知水	一紙	1点
25	肌懸御守 「親」3通 「東京宮本鬼外」ラベル貼付		知水	一紙	1点

心学道話

10	〔宮本亥三二道話草稿〕 表紙なし		(宮本亥三二)	豎冊	1冊
11	〔宮本亥三二道話草稿〕 「東京宮本鬼外」ラベル貼付		(宮本亥三二)	豎冊	1冊
12	〔宮本亥三二道話草稿〕 「東京宮本鬼外」ラベル貼付		(宮本亥三二)	豎冊	1冊
13	〔宮本亥三二道話草稿その他〕	(明治31.8.)	(宮本亥三二)	豎冊	1冊
14	講題并引晰	(~明治35.6.15)	(宮本亥三二)	横半	1冊

建白・伺

9	恩ほうし(宮本亥三二建白書等の控)		(宮本亥三二)	豎冊	1冊
21	心学道話再興之儀ニ付伺	明治17.4.7	藤井清右衛門・田上新平・矢口八太夫・田上陽次郎・万代四郎右衛門・賀屋忠恕・藤田敬祐・宮本亥三二	豎冊	1冊

手扣

37	〔手扣ほか〕		宮本弘道(愚翁)	綴	1綴
37/1	○手扣	慶応3.~明治4.	宮本弘道	小横長	1冊
37/2	○手業減其外要書抜	(文久3・明治元・明治4)	宮本	小横長	1冊
37/3	○沼田郡村々役人帖	慶応4.9.	宮本	小横長	1冊
37/4	○安芸郡村々役人帖	明治2.2.	宮本	小横長	1冊

その他

17	堵庵先生善導口義	安永8.4. (万延2.2.写)	坂上秀之記(中邨弘道写)	豎冊	1冊
15	秋之寝覚 全 (莊子問答・昔シ晰を含む)	嘉永2.8.9 (文久2.8.写)	栗原珍角圭(如心) (宮本弘道写)	豎冊	1冊
38	〔米沢藩知事諭告ニ付心得方御触書〕	(明治4.)4.	広島藩知事	切継紙	1通
23	愚翁道話出版報告文(下書) 「東京宮本鬼外」ラベル貼付	明治41.7.5	総代 岡田俊太郎	一紙	1点
20	〔芸備偉人伝資料原稿〕			括	1括

番号	表 題	年 代	作 成	形態	数量
20/1	○ 栗原如心			縦冊	(1冊)
20/2	○ 万代又右衛門			縦冊	(1冊)